

スキヤンダリズムとリス・ペクタビリテイの間

——奥武則『黒岩涙香——断じて利の為には非ざるなり』——

白戸健一郎

一 本書の概要

本書は、明治大正期に活躍した新聞記者であり小説家の黒岩涙香（一八六二—一九二〇）についての評伝である。黒岩涙香は『巖窟王』や『噫無情』などの翻訳小説により人気を博した小説家でもあり、スキヤン

ダリズムの手法で発行部数を伸ばし、一時は東京府内随一の発行部数を示した『萬朝報』を創刊した経営者でもあった。また、相撲や玉突きなど多趣味で多様な側面からその思想と活動を描くことのできる人物である。本書でも二つ「間奏」も通じて包括的な黒岩涙香像が描かれているが、主として『萬朝報』を発行した

「新聞記者・黒岩周六（涙香）」に焦点を当てている。以下、本書の構成である。本稿ではまず、各章の概要を記し、その後本書の内容について検討したい。なお、論旨の関係から二つの間奏については、最後にまとめて言及する。

はしがき

序章 大衆社会に先駆けた人

第一章 「政治の世界」をめざして

第二章 「政治青年」の挫折

第三章 『萬朝報』以前

間奏一 涙香をめぐる女性たち

第四章 『萬朝報』の創刊

第五章 相馬家毒殺騒動

第六章 「まむしの周六」の虚実

間奏二 趣味人・涙香の周辺

第七章 栄光の『萬朝報』

第八章 たそがれの『萬朝報』

終章 黒岩涙香とは誰のなのか

主要参考文献

あとがき

黒岩涙香年譜

序章 「大衆社会に先駆けた人」では、まず一八九二年に『萬朝報』を創刊した黒岩涙香が「普通一般の多数民人」に時勢を知らせることを目的としたことが指摘されている。著者は「普通一般の多数民人」を「大衆」として捉える。ただ、大衆社会が現出したというののは一九二〇年代半ばである。一八九二年生まれで、一九二〇年に五八歳で死去した黒岩涙香は、幕末

維新期には間に合わず、大衆社会が開花する前に生涯を閉じた人物である。むしろ、大衆社会の成立を見据えて先取りするかのごとく活躍したのが黒岩涙香であった。「相馬事件毒殺騒動」や「淫祠蓮門教会」などのスキヤンダル報道は『萬朝報』を議論する上で避けて通れないものである。それゆえ、黒岩涙香の生涯を追うことが大衆社会の生理と病理を透過することができるとする。本書は黒岩涙香の評伝ではあるが、「大衆社会」という視角から書かれたものである。

第一章「政治の世界」をめざして」では、黒岩涙香の家系と出生、学歴について書かれている。一八六二（文久二）年九月二十九日、土佐国安芸郡川北村の黒岩家の次男として涙香（周六）は生まれた。黒岩家の先祖は戦国期に長宗我部元親の支配に抵抗した安芸国虎の忠臣・黒岩越前守に遡ることができる。自らの出自に「反権力」があつたことは後の涙香の歩みを考える時、人格形成の上で大いに影響があつたはずだとする。また、兄・四方之進は東京開成学校に進み、新天地北

海道に開学した札幌農学校を卒業したエリートであり、養父の黒岩直方は幕末維新期に勤王の志士として波乱万丈の日々を送っており、こうした身近な家系も涙香の自尊心と反権力的精神を形成したと考えられるとする。長じて涙香は故郷を離れて大阪へ出て、先進的な西欧流の教育を提供する大阪英語学校に入学した。ここで涙香は「英語漬け」の日々を送り、後に翻訳小説家として活躍するための語学力を鍛え上げた。涙香が大阪英語学校に在学していた一八七九年、コレラが西日本で流行し、学校も閉鎖された。こうした状況の中、涙香は東京へ行き、夏目漱石も籍をおいた成立学舎に入学した。ただ、涙香は成立学舎を二年ほどで退学し、一八八一年に慶應義塾に入塾した。一八八一年は明治一四年の政変が起きた年であり、慶應義塾も演説会が開かれない日がないほど政治的沸騰が生じていた時期であった。涙香も頻繁に開催される演説会に足を運び、その熱気を感じていた。

第二章「政治青年」の挫折」では、「政治青年」と

してメディアや演説会に関わり、新聞人として生きていくことに決心した涙香の歩みについて書かれている。新聞記者として活躍する黒岩涙香が初めて本格的にメディアに関わったのは、嚶鳴社系の政論雑誌『東京輿論新誌』であった。嚶鳴社は元老院書記の沼間守一が創設した民権結社であり、演説会を定期的に開催し、末広鉄腸、島田三郎、肥塚龍、田口卯吉らが登壇していた。この頃、涙香も政談演説会の弁士として活躍した。『雄弁美辞法』（一八八二年）という言語表現に重きをおいたハウツー本を刊行するほど政談演説に熱心であった。雑誌『東京輿論新誌』でも政論家として活躍し、地方自治や政党を重視した論説を展開した。涙香の周囲にいた島田三郎や肥塚龍は後に衆議院議員になり、涙香も政論家として実力を発揮していたが、彼は負けず嫌いの性格から政治の世界を選ばず、新聞の世界を志すこととなった。なお、この頃、情実人事を批判した社説で管理侮辱罪に問われ、禁錮刑の有罪判決を受け、人生初といえる苦難の時期に直面していた。

第三章『萬朝報』以前』では『萬朝報』創刊前に涙香が行なった新聞創刊などの言論活動について記されている。一八八二年一月に創刊した『同盟改進黨新聞』において涙香は主筆として迎えられ、当時の多くの新聞紙が政党機関紙化していったのに対抗して、「政党ノ外」に立つて「自由改進黨主義」を明らかにする「獨立新聞」を志した。だが、当初の評判は良かったものの、一八八三年一月には廃刊してしまう。新聞が売れなければどれだけ高尚な言論活動であっても継続できないことを涙香は痛感した。一八八五年にはルビ付き絵入りの小新聞『日本たいむず』で言論活動を再開した。これも短期間しか続かず、一八八五年一二月で廃刊となるが、ここで涙香は「大新聞的世界」以外の新聞に触れることができた。その後も小新聞『絵入自由新聞』で主筆として活躍するが、精力的に社説を執筆し社説の啓蒙的役割を強調していった。スキヤンダル報道で著名な黒岩涙香には、啓蒙家としての初心が強くあった。小新聞でありながら政治を論じる「政論」

もしばしば執筆し、政治家やその活動を監視する「政治見物」は人民の義務であり、新聞がその監視機関としての役割を担うべきと説いた。小新聞での経験は涙香に大きな影響を与え、これまで論説記者として自尊心の高さを表す「黒岩大」の名前を用いていたが、以後、それを使わず、幼名の「周六」を用いた。これを宣言する広告を掲載するほどであった。このころから涙香は探偵小説家としても活躍するが、尊大な「黒岩大」の名前を捨てたことは、娯楽調の探偵小説家への橋渡しとなった。原書を乱読していた涙香は、当時の小新聞で一般的であった戯作調の連載小説に飽きたらなさを感じ、英米の小説を自らが翻訳して掲載することを思いついた。涙香最初の翻訳連載小説は「法定の美人」として『今日新聞』に掲載された。これはこれまで論説を中心として言論活動を行なってきた涙香にとって予期できないほど読者をひきつけた。主筆を務めていた『絵入自由新聞』では一八八八年九月に連載を開始すると、精力的な執筆を続け、単行本化もなさ

れ、涙香の声名は高まった。一八八九年には『都新聞』へ破格の待遇で引き抜かれ翻訳連載小説を執筆し、『都新聞』の発行部数増加に大いに貢献した。だが、都新聞社長・楠本正隆との対立から一八九二年七月に退社し、多くの新聞社によるスカウトもありながら、自ら新聞社を興すことを決意した。その結果、同年一月に創刊されたのが『萬朝報』であった。

第四章『萬朝報』の創刊』では、『萬朝報』の創刊までの経緯と東京での発行部数トップにまで至るまでのさまざまな試みが記されている。自らの思うままに新聞を創ろうとした涙香がまず直面したのは、新聞紙条例による保証金規定であった。これに奔走し、宏仏海、町田宗七の扶桑堂が資金の提供をすることとなったが、扶桑堂は以後、涙香の単行本を販売する契約を結んだ。涙香の筆名がどれほどあがってもそれは続いた。紙名は「なに」ことにもよくだつ」という「萬重宝」を『萬朝報』とし、発行所は朝報社とした。短期間で廃刊された新聞を間近に見てきた涙香は、一介の新聞

記者ではなく新聞経営者としてのマインドを保つ必要を自覚していた。売れなければならないし、着実に資金を回収しなければならないということである。こうして出発した『萬朝報』は、創刊号は三万五千部で、七〇〇〇の定期購読者を持った。この数字は発行側からすると予想以上の成績であり、やはり「黒岩涙香の新聞」は「売り」になった。「発刊の辞」では、対象読者を「普通一般の多数民人」とし、「安い価格」と「平易な文章」を徹底することが宣言された。価格は一部一銭で、一ヶ月二〇銭としており、『時事新報』が一ヶ月五〇銭、『東京朝日新聞』が三〇銭であったことからかなりの価格差があった。さらに、朝報社による花見イベントや新聞記者養成塾などの多様なイベントを開催し、涙香の探偵小説の流行にもつて、一八九五年には東京での発行紙のトップに躍り出た。

第五章「相馬家毒殺騒動」では、『萬朝報』によるスキャンダル報道の嚆矢として知られる「相馬家毒殺事件」報道が丹念に分析されている。相馬事件とは、中

村藩藩主の相馬誠胤を、相馬家の家令志賀直道や誠胤の異母兄弟にあたる相馬順胤の母西田りうが精神障害を理由に主君押込を行なったが、それを相馬家に仕えていた錦織剛清が監禁罪や相馬誠胤の毒殺容疑で訴え、一方で志賀側が誣告罪で訴える訴訟合戦になり、錦織側が敗訴した事件である。『萬朝報』はこの事件を錦織剛清を「正義の忠臣」とし、元大名家の資産家家族たち「奸物」と戦うという枠組みを作り「相馬事件毒殺報道」という大きな見出しで連載した。他紙も多数の報道を行っていたが、その中でも『萬朝報』の報道量は突出したものであった。錦織剛清自身や相馬事件関連の著作は数多く刊行され、演説会も多数開催された。裁判結果は錦織側の敗訴で終わったが、涙香は「法式の裁判」と「社会の裁判」は異なり、新聞の機能は「事実の報知機」「社会の賞罰機」にあるとして『萬朝報』は「社会正義」を実現するための報道を展開したのだとして錦織側を擁護した。ただ、スキヤンダル化の手法の面を見ても、うわさや伝聞をもとに多くの

相馬事件の記事を作成していた『萬朝報』は、関連人物の人となりや男女関係、金銭に関するいわゆる「下世話なネタ」を中心に報道することで、読者の関心を引き続けるものであり、事件の正否を主眼にしたものではなかった。

第六章「まむしの周六」の虚実」では、相馬事件のようなスキヤンダル報道で発行部数を伸ばし、「まむしの周六」と呼ばれた黒岩涙香が、いかなる新聞観を持ち、それを実行したのかを明らかにしている。「相馬事件」からの一連のスキヤンダル報道として見られてきた「淫祠蓮門教会」や「蓄妾の実例」が挙げられるが、著者によればこれらは「相馬事件」とは異質なスキヤンダル報道であったという。「淫祠蓮門教会」の報道キヤンペーンでは、専任探訪員一二人を選んで一ヶ月間の取材を行い、「探訪した事実」に立脚して報道した。これは「事実の報知機」としての役割を逸脱しないものであり、調査報道に近いものであったとする。ただ、セックス・スキヤンダルのフレームにはめて大量報道

を行うものであり、蓮門教会を擁護した『改進黨新聞』をも激しく攻撃した。はじめセックス・スキヤンダル
の次元であつたものが、国家神道体制下における異端
宗教批判という当時の社会規範に適合したものに深化
し、蓮門教会を急速な衰退へ導くことに成功し、『萬朝
報』は「社会正義の実現」に寄与した。一八九八年七
月から始まつた「畜妾の実例」は『萬朝報』のスキヤ
ンダル報道の完成形だとする。事実が「あるべき社会
規範」から逸脱しており、そのままスキヤンダルにな
る。しかもその対象は、スキヤンダル報道として価値
の高い著名人である。「蓄妾の実例」は探訪記者に相応
の取材をおこなわせ、森鷗外や西園寺公望、北里柴三
郎など著名人とその妾の実名、住所、年齢と簡潔な説
明を淡々と記載するものであり、煽情的な表現は用い
られなかった。事実報道の形式を取りつつ、あるべき
社会規範を提示したキャンペーンであつた。一方で、
涙香は一九〇一年六月一九日からの七回連続で社説
「新聞紙の道德」という長大な論説を掲載した。スキ

ヤンダル報道を何度も展開してきた『萬朝報』におい
ては奇異なタイトルであるが、涙香の自己認識では「信
ずる所」、すなわち「義」を貫いてきた結果だといひ、
明治初期の大新聞を「義の新聞」として称揚する。と
はいえ、新聞の営業と独立のためには「利」は必要で
あるから、それをすべて否定するわけではない。問題
はその程度であり、特に近年の新聞が「利のみの業」
になつていると批判する。人身攻撃的なスキヤンダル
報道は創刊当初の資金難という背景もあつたが、自ら
の信じる「義」のためであり、断じて「利」のためで
はなかつたという。ただ、その攻撃性には「若気の至
り」があつたと反省もしている。このような反省から
涙香は、社会改良を目指した理想団発足に向かう。

第七章「栄光の『萬朝報』」では、日清戦争前後の『萬
朝報』について書かれている。この時期は『萬朝報』
にとつて発行部数の面でも社員の優秀さの面でも「栄
光の時代」といえる。『二六新報』に一時、発行部数の
トップを奪われるものの、涙香の翻訳小説はとぎれる

ことなく掲載され続け、英文欄を設けて増加しつつある学生読者を吸収するなど硬軟両面において充実していた。社屋も改築して社員も増加し、内村鑑三や幸徳秋水、堺利彦、田岡嶺雲、内藤湖南、河上清、斎藤緑雨、森田思軒など有能な人材が入り出したのもこの時期であった。ただ、この頃から顕著になり始めた報道新聞時代の到来は、『萬朝報』衰退の兆しでもあった。

日清戦争後の一九〇一年に社会改良運動を行う理想団を結成した。結束に当たり論説「平和なる檄文」を『萬朝報』に掲載し、一度退社していた内村鑑三が再入社して運動が展開された。理想団は「腐敗した社会」を批判し、「社会改良」を訴える運動であった。志は高邁ではあったが、「私利私欲を捨て公義心を持つ」という個人の修養レベルにとどまり、東京を中心とした都市部で加入者があるのみで、のちの社会主義運動や労働組合運動に比べると組織基盤は脆弱なままで運動としては大きなものにはなりえなかった。また、理想団は政党ではなかったがあまりに現実的な成果を伴わな

ったため、具体的な政治活動へも傾斜していった。本番の選挙の前に理想団団員により投票を行い、その上位に入った人物を理想団として投票するなどの「政治への接近」を図っていた。ただ、涙香は日露戦争後にはより深く政治へと接近していくことになる。

第八章「たそがれの『萬朝報』」では、日露戦争前後の『萬朝報』について扱っている。低価格路線により販売部数を伸ばしてきた『萬朝報』であったが、報道新聞としての機能を拡充する必要に迫られた際に、資本蓄積が乏しく十分な事業展開ができなかった。また、日露戦争前、幸徳秋水や内村鑑三などの有能な若手論者は非戦論を展開していたが、編集部内の主戦論者による突き上げが激しく、内村、幸徳、堺は退社して『萬朝報』は開戦論へと舵を切ることになった。ただ、かつて東京で首位を走っていた『萬朝報』も価格の低さからくる貧弱な戦況報道態勢や紙面の狭さは、『大阪朝日』や『大阪毎日』など他紙と比較すると明らかに見劣りするものであった。一方で、通信費や号外、人件

費は上がり、台頭する大阪系商業新聞との競争から落伍していくことになった。日露戦争後、『萬朝報』は講和条約に反対し、日比谷公園で開かれる講和条約反対国民大会への参加を呼びかけ扇動する側であった。また、一九〇六年の東京電気鉄道株式会社の市営化問題にもコミットし、周囲からも政治運動への期待を語られ涙香自身も「政治運動を運る積」（一九一二年）と述べるほどまでになっていた。政治運動への傾斜と軌を一にするように、翻訳小説の筆は鈍っていた。翻訳小説を連載していた「涙香小史」欄は一九〇四年頃から断続的になり、一九〇八年から長期間停止していた。一方、当時の他の人気を博した新聞小説として、尾崎紅葉「金色夜叉」「読売新聞」一八九七年―一九〇二年）や夏目漱石「虞美人草」「朝日新聞」（一九〇七年）があり、すでに新しい世代の新聞連載小説が台頭してきていた。政治運動へ傾斜していった『萬朝報』は、第二次西園寺内閣の後継首相として内大臣桂太郎が総理大臣へ任命されたことへの反発から憲政擁護運動が

起きると、桂批判のキャンペーンを展開し、その後の山本権兵衛内閣ではシーメンス事件が生じるとこれを強く批判した。山本内閣批判の先導にあつた『萬朝報』は、後継の大隈重信内閣では人事を相談し合うほど深く関わることになった。その結果、これまで独立新聞を標榜してきた『萬朝報』は「大隈の御用新聞」とのレッテルを貼られ、『朝日新聞』の村山龍平や『毎日新聞』の本山彦一、『国民新聞』の徳富蘇峰と共に黒岩涙香が叙勲した際には、大隈内閣の論功行賞とも揶揄された。『萬朝報』の凋落を象徴的に示すのは、涙香がパリ講和会議へ新聞社代表として派遣されるさいに、出発直前になり代表としてふさわしくないと他紙から批判を受け、私費で渡航することになったことにある。帰国後、講演や旅行記を執筆するなどしていたが病状が悪化し、一九二〇年一〇月六日に死去した。

終章「黒岩涙香とは誰だったのか」では、涙香死後の『萬朝報』に言及している。涙香の追悼文を書いた編集局長の斯波貞吉は、後に常務取締役兼主筆となる

が、一九二五年に『萬朝報』の再建を諦め、衆議院議員となった。『萬朝報』は以後もほそぼそと経営を続けるが、一九四〇年に『東京毎夕新聞』に吸収合併され、その歴史を閉じた。最後に「黒岩涙香とは誰であったのか」という著者なりの問いに答えて終えている。「眼に王侯なく手に斧鉞あり」を編集室に掲げた独立新聞『萬朝報』は、普通一般の多数民人をターゲットにした廉価多売による資金調達により独立を果たした。スキャンダル報道を用いることもあったが、理想団結成や「蓄妾の実例」キャンペーンなどから読者の興味関心を強く引くものを作り続けていたわけではなく、新聞観の転換があるとするのが筆者の回答である。すなわち、「まむしの周六」によるスキャンダルリズムを得意とした前期涙香から理想団的精神主義の後期涙香といった二期が黒岩涙香にはあるといえる。また、鶴見俊輔や三宅雪嶺に涙香評としての「文化総合者」というものがあるが、著者は「普通一般の多数民人」を捉えようとする「新聞記者」が本質であったとする。

なお、間奏一「涙香をめぐる女性たち」では、涙香の女性関係を、特に最初の結婚の複雑さについて書かれている。最初の結婚相手の真砂子の実母は涙香の下宿先の女主人・鈴木ますであるが、同時代の雑誌では「情を通ずる」ほどに深い関係にあり、実子ももっていた。ますの死後、真砂子とは離縁し、赤坂の芸妓すがと再婚している。間奏二「趣味人・涙香の周辺」では、「趣味と実益との無尽蔵」を謳った『萬朝報』の社主・黒岩涙香の多趣味さと研究熱心さについて書かれている。涙香は玉突き、競技かるた、相撲、闘犬、都々逸などを趣味としてかなり熱心に追求していたが、玉突きを「文明の社会」における「社交的遊戯」を強調したり、悪趣味を良趣味へと導くことが社会の健全化に役立つと位置づけて実践していた。

二 本書の意義と課題

以上、本書の概要について記してきた。以下では、本書の意義と課題について触れたい。

本書の意義は、『萬朝報』のスクヤンダル報道の多義性について明らかにしたことにある。黒岩涙香の連載小説とスクヤンダル報道で発行部数を挙げた新聞と考えられ、いくつものスクヤンダル報道は一緒くたにまとめられがちであるが、著者は緻密な読解から前期スクヤンダル報道の「相馬事件」と後期スクヤンダル報道の「淫祠蓮門教会」や「葦妾の実例」の断絶性を強調する。前期スクヤンダル報道は、うわさや伝聞をもとにスクヤンダラスな記事を大量に書くことで売上を伸ばしたが、後期スクヤンダル報道は事実を丹念に収集して記事にした調査報道であるという。さらに著者は、このようなスクヤンダル報道の展開の背景について、『萬朝報』が置かれた状況と黒岩涙香の新聞経営者としての成長という観点から説得的に説明している。すなわち、前期スクヤンダル報道の典型例である「相馬事件」が記事化されたのは『萬朝報』が創刊間もない頃で資金不足にあり、「利」を重視しなければならぬ環境に置かれていたのである。加えて、当時、三二

歳であつた黒岩涙香の新聞経営者としての経験もまだまだ浅かつた。このような新聞社としての「未成熟さ」と黒岩涙香の新聞経営者の「未成熟さ」の交叉点に「事実報知機としての新聞」から外れた「相馬事件」報道があつた。黒岩涙香自身も明示はしていないが反省の言を残し、後年になつて論説「新聞紙の道德」の点からも裏付けられており興味深い。このような新聞経営者としての黒岩涙香の新聞観の成長を描くことができる点に評伝の面白さがある。また、このような「利」と「義」の狭間を動く黒岩涙香の新聞経営者としての活動は、資本主義組織として活動しなければならぬジャーナリズムが抱える普遍的な問題を指し示しているといえよう。

次に、本書の課題を考えてみたい。なお、課題というよりは評者としてもう少し詳しく知リたかつたという点を四点ほど挙げたい。

第一に、スクヤンダルをスクヤンダルとみなした黒岩涙香の思想形成についてである。「葦妾の実例」で批

判した一夫一婦制は、当然ながら近代西欧の市民的価値観（リスペクタビリテイ）というべきであろう。黒岩涙香にとつてこの価値観はどれほど重要なものであったのか。穂積八束の「民法出でて忠孝亡ぶ」で知られる民法典論争は、一八九〇年頃からは始まっており、

一八九八年に妾を認める新民法として施行された。著者の『スキヤンダルの明治』（一九九七年）では言及されているが、これへの批判から「蓄妾の実例」も開始されたと考えられる。ただし、一夫一婦制を導出する近代家族規範はその根底にロマンティックラブイデオロギーをもつ^(二)。ロマンティックラブイデオロギーを基盤にした一夫一婦制を積極的に主張するには、間奏一にあるような同時期の黒岩涙香の「家庭」はあまりに複雑である。最初の結婚は一八九二年、「蓄妾の実例」の連載開始が一八九八年、離婚が一九〇八年、再婚が一九一〇年であり、「不幸な結婚」期間は一年以上継続しているし、「蓄妾の実例」はその最中に連載を開始している。花柳界通いはありそれが「幸福な再婚」へ

とつながったようだが、黒岩涙香に自身の家庭と主張との落差に内的葛藤はなかったのか。妾を囲っていたわけではないが、その基盤のイデオロギーを考えるならば、私的現実と公的主張とをいかに調整していたかは気になるところである。

第二に、『萬朝報』がターゲットとした「普通一般の多数民人」とは誰であったのか、という点である。『萬朝報』は「普通一般の多数人民」を対象に「安価」で「簡潔」な文化総合的娯楽新聞として、「日本のマス・コミュニケーションを自覚的に作り出した」と後世のジャーナリズム研究で評価されている^(三)。著者は対象とされた「普通一般の多数民人」を「大衆（マス）」であったというが、ここである「大衆」あるいは『萬朝報』の読者とはどのような人々であったのかについては、もう少し言及されても良かったのではないかと考える。『萬朝報』が創刊され、スキヤンダル報道を開始していくのは明治二〇年代後半であるが、その明治二〇年代は上京遊学の時代でもあり、東京府下では約三

万人の学生が学んでいた^(三)。『萬朝報』で記者を勤める堺利彦も明治一九年に福岡から上京している。また、『萬朝報』がさらに発行部数を伸ばし、「栄光の時代」を謳歌する明治三〇年代（一八九七―一九〇六）こそ学校を主軸とする教育体制が整備されてきた時代である。法令面では一八九九年には私立学校令が、一九〇三年には専門学校令が公布されている。満二〇歳の男性の学歴も、明治三年では高等小学校卒以上が七・八%、尋常小学校以上が四三・二%であったのが、明治四三年になると高等小学校卒以上が二六・一%、尋常小学校卒以上が七七・二%にまで上昇している^(四)。近代的規範を習得するには、近代的学力と教養とが必要になるが、その場はこの時代においては学校であった^(五)。さらに、黒岩涙香の哲学書『天人論』はベストセラーになっているし、『萬朝報』では内村鑑三を中心に英文欄を創設させている。このような点から、スキャンダル・メディアとしてよく知られ、「安価」「平易」をモットーとした『萬朝報』のターゲットである「普通一

般の多数民人」は、中産階級的な「大衆」ではあっても「下層大衆」とは必ずしも思えない。早稲田大学卒の江戸川乱歩が黒岩涙香を耽読していたように、評者は『萬朝報』の受容にあつて、学生や学校教育の整備はかなり重要な要因だったのではないかと考える。『萬朝報』は「普通一般の多数民人」「安価」「平易」のスキャンダル・メディアという性格から推し量られる大衆新聞の姿よりも、まさに孵化し始めようとしている「中産階級の卵たち」の新聞のようにみえてくる。ただし、『萬朝報』は勃興しつつあった中産階級、あるいは市民階級のための新聞であつて、確立したあとの中産階級の新聞ではなかったのではないか。それゆえ、発展途上における中産階級の糧となり、伴走しえたが、中産階級が安定し始めた時期にはその役目を終えた。中産階級が求めたのは『朝日新聞』や『毎日新聞』といった中立的な報道新聞であつた。とりわけ、それは短期間に戦われた二度の対外戦争という報道がきわめて重視される国家イベントを経ることで明々白々とな

った。戦争が社会システムを大きく改変していくことは自明ともいえるが、メディアもその例にもれない。著者も指摘しているが、報道が重視されるイベントにおいて『萬朝報』は創刊当初のモットーである「安価」が軀となつて適応できなかった。『萬朝報』の急転する栄光と没落は、後発国民国家・日本が足早に近代化の歩みを駆け抜けざるをえなかった姿の一つの反映であろう。

第三に、「社会悪」とジャーナリズムの関係についてである。評者は「社会悪」という概念はメディア史研究においても今後着目していくべきものではないかと考えている。近年、メディア史研究の「弾丸効果論の時代」とされてきた期間においても、受動的な受け手を想定する弾丸効果的なプロパガンダ論は否定されつつある^(六)。むしろ、メディアがもつ機能として着目すべきは、受け手の態度、記憶、思想、価値観を長期的に形成していく点ではないか。そう考えるとメディアが何を「社会悪」と設定して報道したのかであろう。

メディアという文化権力が長期的に受け手をどう形作ってきたのがメディア史としても必要になってくるのではないか。例えば、「政党政治と政商の結託が腐敗をうむ」という議題は、民政党政権期の疑獄報道のようにメディアの中でしばしば取り上げられてきたが、そのような政党と政商の結託による腐敗を根拠とした事件として著名なのが、五・一五事件である。五・一五事件の実行者が、「政党と政商の結託による腐敗」を犯行根拠の一つとして声高に説き、国民からの同情を集め、多数の減刑嘆願書を集めた^(七)。また、一九三四年の帝人事件の引き金を引いた『時事新報』の連載「番町会を暴く」も「政党と政商の結託による腐敗」を「社会悪」として糾弾し、齋藤実内閣総辞職の原因となつた^(八)。メディアが曖昧な「社会悪」をどう作り上げ、いかなる影響を及ぼすことになったかという研究は、今後なされてよい領域ではないかと考える。

第四に、黒岩涙香の大隈重信内閣への関与に関する点である。ここは評者個人としてはもう少し分厚い記

述が欲しかった。本書でも言及されているように、第

二次大隈内閣成立の要因をなした第一次護憲運動を主導した新聞社に対し、論功行賞のように記者叙勲を行なったが、その中でも黒岩涙香は先導的な役割を果たし、大隈のブレーンともなった。大隈重信はイメージ戦略を重視した政治家であったが^⑨、大隈と深いつながりを持った黒岩涙香と『萬朝報』はその大隈イメージ形成においていかなる役割を果たしたのか。また、大隈系新聞であった『報知新聞』とイメージ戦略においていかなる差異や棲み分け、類似性があつたのか。衰退する『萬朝報』と興隆する『報知新聞』における比較も含めて、切り込む価値はあつたのではないかと考える。

以上、四点ほど課題を挙げたが、これらは今後評者が取り組んでいきたいと考えているものも含んでおり、本書としては屋上屋を架すものであると思う。本書は多様な側面をもつ黒岩涙香のもっとも重要なアイデンティティとなっていた「新聞人」の本格的評伝とし

て貴重なものである。

③ 上野千鶴子『近代家族の成立と終焉』岩波書店、一九九四年、八四八九頁。

④ 鶴見俊輔『ジャーナリズムの思想』『ジャーナリズムの思想 現代日本思想体系 二』筑摩書房、一九六五年、一七八頁。

⑤ 天野郁夫『浮世の社会史』平凡社、二〇〇五年、一二三頁。及び、竹内洋『立志・苦学・出世』講談社現代新書、一九九一年、六二六頁。

⑥ 天野郁夫、前掲書、二〇二二〇四頁。

⑦ 佐藤八寿子『ミッシェン・スクール』中公新書、二〇〇六年、三四三五頁。

⑧ 受け手の能動性に関するメディア史的研究としては、日本では佐藤卓己『流言のメディア史』岩波新書、二〇一九年。イギリスでは津田正太郎『聴く』プロパガンダ』『社会至存』六五（三）、二〇一八年二月、二四五頁。なお、津田はプロパガンダの効果の判断において、立場によって異なるインセンティブが生じることを指摘している。

⑨ 小山俊樹『五・一五事件』中公新書、二〇二〇年、第五章。

⑩ 拙稿『普遍選挙体制下のメディア政治家 佐藤卓己・河崎吉起編』近代日本のメディア議員』創元社、二〇一八年、一五二・一六二頁。

⑪ 伊藤之雄『大隈重信』下巻、中公新書、二〇一九年、九三二・一〇〇頁、二二二・二三三頁。なお、伊藤は大隈を「ポピュリズム的手法は使うが、国民のよく考えぬかれた理性的意見である輿論を重視し、現代的な意味でのポピュリストではない」と位置づける（同書、三四七頁）。